



TITLE:

図書室めぐり 経済学部図書室 - 特殊文庫を中心として -

AUTHOR(S):

CITATION:

図書室めぐり 経済学部図書室 - 特殊文庫を中心として -. 静脩 1978, 15(3): 4-5

ISSUE DATE:

1978-08

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/36812>

RIGHT:

経済学部図書室

—特殊文庫を中心として—



経済学部図書室の歴史は官制的には大正8年の法学部からの分離・独立をもって始まるとされているが、実質的には法科大学第2図書室として、経済学全般にわたる収書を開始した明治32年にまでさかのぼるといえる。以来、本年3月末までの蔵書数は約30万冊に達する。現在の施設の概要については『静修』14巻4号の法学部図書室の紹介に詳しいので、ここでは経済学部の蔵書のなかで、とくに注目すべき特殊文庫について述べることにする。

第一次大戦の敗戦国ドイツは窮迫した生活条件のもとで、すぐれた文化財の多くを海外に売却しなければならなかった。学者の個人蔵書もこの例にもれなかった。この時期にわが国に送り込まれた著名な社会科学関係のコレクションとしては、メンガー、ゾンバルト、ビューヒャー、マイヤーの4文庫があるが、本学部はこのうち、三菱合資会社の岩崎小弥太氏の寄贈によりビューヒャー文庫が大正13年に、さらに賠償金図書という名目でマイヤー文庫が昭和6年大蔵省より移譲された。前者は11,466冊、後者は未整理のパンフレット類を加えると優に30,000冊を上廻る大文庫である。いずれも経済学を中心として、社会科学全般にわたる収書である。後者には旧蔵者の専門である統計学に関する古典的な文献、および世界各国におよぶ統計資料が豊富に集められている。このう

ち、ビューヒャー文庫は昭和45年に約50年ぶりに目録が出版された。

言論の自由を中心的テーマとし、ジャーナリズム全般にわたる広範な収書の内容とするのが、上野文庫である。元朝日新聞社主上野精一氏は、思想・言論・出版の自由に深い関心をよせて、約60年にわたって内外の文献を収集してきた。新聞経営者という実践的な立場と、ジャーナリズム史の研究者という学究的な立場からの収書は周到にして緻密という内外からの定評をえている。メイン・テーマは上述のように新聞・ジャーナリズムの歴史であるが、その歴史的背景をなす政治・経済・社会学等に関する文献が豊富に集められているのも、この文庫の大きな特色である。目録は昭和37年までに「解題目録」が3分冊の形で出版され、それ以後の寄贈分については、第2期上野文庫目録として今春すでに2冊が刊行され、今秋には第3冊目が追加刊行される予定である。以上6冊の目録に掲載されている分だけで、計23,129冊。今後さらに増えつづける京都大学最大のコレクションである。なお、本文庫には、京都大学では三冊目のインキュナビュラ（初期活字本）であるトマス・アキナスの『神学大全』（1482年）ほか数々の稀覯書が含まれている点も注目に値しよう。

財部文庫は戦前本学部で統計学を講じた財部静一教授の旧蔵書であり、和書2,776冊、洋書1,970冊である。エンゲル、ヨナーク、ケトレーなど著名な統計学者の古典的著述が多いほかに、和漢書には本草学に関するものも少なからずみられる。

河上文庫は本学部の創立50周年に際しご遺族より寄贈された故河上肇教授の旧蔵2,407冊の書籍、および原稿、ノート類約200点である。扉や見返しに時折々の感懷を記した手沢本が多いのがこの文庫の特徴の一つであらう。本文庫とは別にご遺族から昭和51年1月約300点の日記、原稿、覚書

き等の寄託を受けたので、本学部ではこれらを一括して、明春までには目録を刊行すべく準備中である。

以上述べた特殊文庫に属する図書は、学部が貴

重書として指定したものを除き、おおよそ一般図書に準じて利用することができる。ただ、マイヤー文庫は未整理本が多数のため、当分利用はできない。

—— 資 料 紹 介 ——

尊攘堂 —— 維新特別資料文庫 —— について

京都大学西門の坂を上り切った南側、その西北隅に明治の面影を残した、ささやかな平屋の洋館が建っている。入口に「京都大学原子炉実験所分室」と書かれた標札が掛けてある。この建物が戦前の尊攘堂である。最近本館で品川弥二郎書簡を入手したので、この機会に尊攘堂について、京都大学の構内に建てられたいきさつを含めて、その沿革をしばらく回顧してみたい。ややもすると忘れられがちな此堂のことを歴史の一コマとして記憶にとどめていただければ幸いである。

話は幕末にさかのぼる。吉田松陰は早くから京都に尊攘堂を建てて勤王の志士を祀り国民の志気を鼓舞したいという大志を抱いていた。しかし彼は安政の大獄に刑死して彼の企望は空しく水泡に帰した。その刑死に先だつ一週間前、彼は江戸伝馬町の獄中より門下の入江子遠に書簡を送り尊攘堂建設の後事を託したが、子遠もまた元治元年の戦に敗死して書簡は子遠の手にとどかなかった。品川弥二郎は所在不明のまま二十余年間埋没していたこの松陰の書簡を偶然、水戸で入手した。彼はこれを読んで松陰の憂国の至誠に感動し、独立で先師松陰の悲願を実現させんと固く心に誓った。彼は明治三十年京都市高倉通錦小路に尊攘堂を創設して松陰の宿志を継承し、先師の遺訓に応えた。品川は苦心経営の末に竣工させたこの尊攘堂の中に幕末維新の殉難志士の英霊を祀り、また彼等の事蹟に関する史料、遺墨、遺品を極力蒐集してこれを堂内に収納して丁重に保管した。更に彼は毎年志士の慰霊祭を荘厳に営み同時に堂内に彼等の遺墨遺品を展示して参拝者の従覧に供した。これは一つに先賢志士に対する追慕の誠を尽



し、また一つにはこれによって国民精神の高揚を促すためであった。彼は毎年この祭典と展観を数十年の長期に亘って励行した。

彼の松陰と物故志士に対する崇敬と追善の熱情を風聞した国内の有志は殉難志士の言行を語る記念の遺品遺墨を相次いで彼に贈呈した。志士のこうした記念品は品川自身の手で集められたものももとより多いが有志の寄贈も夥しく、彼の生前すでに千数百点の多数に達していた。彼はこれ等の貴重な記念品を一家の私有とすることを潔しとせず、またその焼失、損亡等の不慮の災害を恐れて彼が選定した尊攘堂保存委員と、堂とその所蔵品の永久保存の方法を合同協議した。しかし彼は其の方策の結論が下される前に病魔に犯され明治三十三年二月十六日京都で奔放不軌の政治家として波瀾の生涯を閉じた。享年五十八才であった。

品川の死後、保存委員松本鼎等は品川の嗣子弥一等と計って京都帝国大学の構内に尊攘堂を新築し、かつ錦小路の尊攘堂の所蔵品を全部、同大学に寄附することを決議した。明治三十三年十月、其の旨を文部大臣に要請して同三十四年二月許可